

シリーズ

お互いの力でまちづくり ⑥

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

人間の生きがいということを考えてみると、その人がその生涯に、どれだけ他人に良い影響を与え、その波紋をひろげられるかということだろうと思います。

まちづくりも同じで、一人一人が、他人にどれだけ良い波紋をひろげるかにかかっています。そういう人が多く住むまちほど発展しています。言い換えれば、まちづくりというのは、他人のことを考えることなのです。

変わった発想は 進んでいること

ところが、せっかくだれかがまちづくりへの斬新な提言をしても、「あいつは、変わり者だからな」の一言で片づけてしまうことが多い。

つまり、他人の芽を簡単に

他人の芽を摘まなかったか

摘んでしまうのです。変わった発想をすることは、進んでいることなのに、それに目や耳を貸す人がいないまちは、いつまでたっても伸びるはずがありません。

「レッツラブ大分」の合言葉のもとに、一村一品運動を展開したあの大分県。これが成功したのは、知事が周囲から「変わり者」といわれる人たちの意見にも耳を傾け、行政に反映させたからです。

らせん状の橋で 温泉峡を活性化

青森県黒石市の市長は、とても頭の柔らかい方で、住民のまちづくりに対する情熱の芽を摘むことなく、常に新しい発想を受け入れました。このまちには温泉峡があります。しかし、これが国道のはるか下方にあり、観光客の



柔軟な姿勢で

意見や提言に

耳を傾ける

てくれ。何か打開策はあるはずだ」と、ゴーサインを出したのです。それで、いろいろ知恵を絞った結果、なんと、らせん状の橋が誕生することになりました。そのうちに、この温泉峡には、観光客がドッと押し寄せるようになるでしょう。

ダメの一言が まちをさびつかせる

このように、だれかが意見を出したり、アイデアがひらめいたときには、みんながそれに注目することが大切なのです。特に、まちづくりのリーダーシップをとる立場の人には、この姿勢が絶対に必要です。「そんな考えは、机上のプランにすぎないよ」と、頭から「ダメ」と片づけてしまふのが、いちばん残念なことです。これでは、だれも提言しなくなってしまうのは当然です。

「どうせ提言しても、何にもならないのだから」と、まちづくりへのステップがさびびつてしまふのです。

訪れがいまひとつでした。そこで、地元の若い有志たちが、「なんとか国道から温泉峡へ通じる橋が架けられないものだろうか!？」と考え、市役所に陳情しました。

普通なら、「そんな段差のある傾斜した所に橋など架けられるはずがない」という答えが返ってくるのですが、市長は即座に、「架けられる方法を考えてみ

